

## 主体なき謝罪

東條 加寿子

夏休み中、8月14日の安倍談話はライブで聞いた。翌日、新聞やウェブには談話の全文が英訳(政府発表)とともに一斉に掲載された。英訳を読んで、前日、談話を聞いて何か煙に巻かれたような漠然とした感覚の原因がはっきりとするのを感じた。折しも、新聞各誌には談話の評価が並んだ。「自らの歴史認識は曖昧にしつつ、言葉を盛り込む手法」で一定の評価を上げたというコメントがある反面、辛辣なメディア批判も展開された。もっとも辛辣な批判の一つに、「謝罪」「反省」といったキーワードは入っているがいずれも主語がない(朝日新聞8月15日朝刊)という批判があった。ここでは、日英比較にみる安倍談話の「主語」の問題を考えてみようと思う。それに際して、まず断っておかなければならないのは、本小欄は同談話の政治的解釈や評価について言及するものでは決してない。ここでは純粋に日英の言語表現比較を試みているという点を、是非、ご理解いただきたい。

まず客観的に、同談話の「主語」はどのように分布しているのだろうか。主格主語を日本語、英語それぞれで数えてみると、以下のような結果だった。

談話(日本語)		談話(英訳)	
「私は」	0回	“ I ”	4回
「私たちは」	10回	“ we ”	22回
「日本は」	5回	“ Japan ”	17回
「我が国は」	7回		
「私たち日本人は」	1回	“ we Japanese ”	1回

英訳では「私たちは」は“we”、「日本は」は“Japan”というように、概ね文字通りの訳がなされているが、例外として「我が国は」は“Japan”で置き換えられている。日本語では主語がなくても文が成立するが、英文では主語が不可欠であるため、英訳談話で主格主語出現頻度が高いことは当然の結果といえよう。一つ興味深いのは、日本語では一例も見られない「私は」(“I”)が英訳で4回出現していることである。その箇所は、「国内外に斃れたすべての人々の命」に対して「痛惜の念を表し、「哀悼の誠を捧げる」という箇所(“I bow my head deeply. . . I express my feelings of profound grief . . .”)と、取り返しのつかない歴史的事実に対して、「断腸の念を禁じ得ないとする箇所(“When I squarely contemplate this obvious fact. . . I find myself speechless . . .”)」で、いずれも首相の個人的な強い“感情”を表現している箇所、さすがに“I”以外で主語を代用することはできない箇所である。

談話の核心の部分、「我が国は、先の大戦における行いについて、繰り返し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明してきました」・・・「こうした歴代内閣の立場は、今後も、ゆるぎないものであります」の英訳は以下のように発表されている。

Japan has repeatedly expressed the feelings of deep remorse and heartfelt apology for its actions during the war. . . . Such position articulate by the previous cabinets will remain unshakable into the future.

この英訳を読んだ辺りで、冒頭で述べた漠然とした違和感を覚えた。この英訳で果たして「謝罪」は表現されているのか。「謝罪」の主体は“I”であるべきではないか。唯一“I”が用いられている上記箇所は首相の個人的な強い“感情”を表現しているのであり、それは「謝罪」とは別物であろう。当の核心部分の主語は英語では“Japan”となっていて、my country ならばまだしも、第三者的(三人称)の国家“Japan”では謝罪の主体としては適切とは言えないのではないか。ちなみに、British National Corpus で“apologize”を検索してみると、人称代名詞が主語になる場合は、“I”との共起が圧倒的に多く、“we”が主語になる場合は、皆無に等しい結果であった。

もう一つの主語分析の観点、同談話における「私たちは」と「日本は」または「我が国は」との使い分けである。談話では、「日本は」は主に“(戦争に関わった)過去の日本”に歴史的に言及する時に用いられ、「我が国は」は“現在の日本、未来の日本”を意味し、国としての使命や責任を内包していると解釈できる。ちなみに、英訳では「日本は」「我が国は」の両方について“Japan”が用いられている。一方、「私たちは」は“(首相自身を含む)今を生きる私たち日本人”と概ね同義で用いられているようだ。

注目すべきは、最後の「終戦八十年、九十年、さらには百年に向けて、そのような日本を、国民の皆様とともに創り上げていく。その決意であります」の部分である。英語では次のように訳されている。

Heading toward the 80<sup>th</sup>, the 90<sup>th</sup> and the centennial anniversary of the end of the war, we are determined to create such a Japan together with the Japanese people.

最後になって初めて、“we”から“the Japanese people”が分離され、政府が主体となった決意が語られている。英訳では主体としての“I”を使う最後のチャンスだったとも言えるが、結局“I”は用いられなかった。

安倍談話には世界中の国々が高い関心を持って耳を傾けただろう。その際、ほとんどの国々が英訳談話に頼ったはずである。英語で正しくメッセージが伝わるかどうか。言語的に多角的な思慮や配慮が求められる時代である。

主体なき「謝罪」。英訳では「謝罪」は表現されなかったのではないか。意図されたことであるならば、“あっぱれな”英訳ともいえる。

---

(とうじょう・かずこ 教授/教員養成センター)

---